The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	飯沢匡作品研究
Author(s)	金, 裕彬
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/76329
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　金　裕彬　　）	
論文題名	飯沢匡作品研究

論文内容の要旨

本論文は日本の近現代風刺喜劇作家である飯沢匡の代表作を考察し、日本演劇史における飯澤の作品の意義を明らかにすることを目的とする。飯沢匡は日本では少ない風刺喜劇を主に描き下ろした劇作家であり、彼の作品群は日本の演劇史において特色が濃い作品であるにも関わらず研究の事例がなかった。戦争中から1980年代までたゆまずに社会風刺喜劇を書いていて、様々な劇団によって上演されてきた。本論文では作品が書かれた時期を戦争中、戦争直後、1970年代以降の3期に区分し、各作品の特徴について考察する。

まず序章では飯沢匡の生い立ちと初期作品について考察する。飯沢は裕福な家庭で育ち、その経験を生かして文化学院在籍中に処女作である『画家への志望』と『藤原閣下の燕尾服』を書き下ろした。これらの作品は文化学院の文学部の劇団「テアトル・コメディー」によって上演された。「テアトル・コメディー」は以降文学座に繋がっていて、これは飯沢と文学座との縁の始まりであった。

第一章では戦争中に書かれた二作品『北京の幽霊』と『鳥獣合戦』を中心に、検閲があった時代にどのような工夫をして上層部への風刺作品が無事に上演されることができたかについて考察する。

第二章では戦争直後の作品の中で『塔』と『もう一人のヒト』を取り上げ、各作品の頭頂について考察する。戦争中に徹底的な非リアリズム作品を書いていた飯沢はこの時期からリアリズムの方に変わることになる。戦争後の不安定な時期にどのような風刺喜劇が完成されたかについて明らかにする。

第三章では飯沢の政治風刺喜劇３部作のなかで『多すぎた札束』と『クイズ婆さんの敵』から本格的政治風刺喜劇がどのような形で書かれているかについて考察する。各作品は実際にあった政治スキャンダルからモチーフをとっていて注目すべきである。

全般的に見ると、飯沢の作品は当時の時代を風刺する事が多く、戦争の前後に書かれた作品は反戦・政権批判・天皇制反対の内容を含めている。後半の作品は実際起きた政治スキャンダルを用いることで当時の政権を批判していた。

飯沢匡は約50篇程の戯曲作品を残している。そして劇団文学座・劇団民藝・青年劇場とも深い縁を結んでいる。しかし、彼の作品に関する研究は行っておらず、時々雑誌の特集記事などで劇評が少し見れる程度である。本論文は初めての飯沢匡の作品の研究論文としての意味を持てればと思う。飯沢の作品の中で戯曲作品は『飯沢匡喜劇集』（全6巻）、『飯沢喜劇全集』（全6巻）で確認できる。また飯沢は本人の演劇論が含まれたエッセイ集もいくつか出版していて、その代表的な本は『武器としての笑い』（1977年）である。『コメディの復讐』（1986年）には飯沢の演劇論と劇評などが載っているので彼の演劇世界を理解するのに潤いになると思う。本論文で考察する作品はその一部分で過ぎないが、本論文が飯沢匡の作品が再照明されるきっかけになることを願う。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　金　裕彬　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主　査	大阪大学　教授	永田　靖
	副　査	大阪大学　教授	伊東　信宏
	副　査	大阪大学　准教授	中尾　薫
	副　査	大阪大学　准教授	古後　奈緒子

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　飯沢匡作品研究

学位申請者　金　裕彬

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　永田靖

副査　大阪大学教授　伊東信宏

副査　大阪大学准教授　中尾薫

副査　大阪大学准教授　古後奈緒子

【論文内容の要旨】

本論文は日本の近現代風刺喜劇作家である飯沢匡の代表作を考察し、日本演劇史における飯沢の作品の意義を明らかにすることを目的とする。飯沢匡は日本では少ない風刺喜劇を主に執筆し続けた劇作家であり、その重要性は認められているものの、日本演劇史研究においてほとんど研究の対象とはなってこなかった。ここでは作品が書かれた時期を戦時下、戦後直後、1970 年代以降の 3 期に区分し、各時代を代表する作品を取り上げて、飯沢匡の主としてドラマツルギーについて考察する。

序章では飯沢匡の生涯と作品群について概観する。飯沢は裕福な家庭で育ち、芸術への関心を育み、文化学院在籍中に処女作である『画家への志望』と『藤原閣下の燕尾服』を書き下ろした。これらは劇団「テアトル・コメディー」によって上演されたが、これがいわゆる左翼劇団ではなく、西欧の喜劇を上演する劇団であったことは飯沢匡にとって僥倖であった。その後この劇団は劇団「文学座」に繋がり、飯沢を本格的に演劇の世界に押しやることとなる。第一章では戦時下に書かれた代表作二作品『北京の幽霊』と『鳥獣合戦』を取り上げる。これらは劇の概観においては滑稽な喜劇の相貌を示しつつ、内容として戦争に向かう愚かさを風刺するという二重性を構造として持ったものであった。第二章では戦争直後の作品の中でも代表的な作品『塔』と『もう一人のヒト』を取り上げる。前者は新興宗教を、後者は天皇制を扱った劇で、戦時下でのドラマツルギーは基本的に非リアリズム、しばしば寓意劇のような作品を書いた飯沢は、戦後にはリアリズムを基調とする作品に変わって行く。戦後日本人の意識や社会問題を描くことで、国家として方向性が定まらぬ時代を自由に風刺することで観客の社会意識に刺激を与え続けた。第三章では、戦後の混乱の時代を経て、70 年代以降の高度経済成長を遂げつつある日本の社会を見据えた保守的な政治風土を風刺した。この時期の代表作である「政治風刺喜劇三部作」のなかで『多すぎた札束』と『クイズ婆さんの敵』を取り上げ、前者はロッキード事件、後者は金大中拉致事件を扱いながら、政治と一般庶民の関係にくさびを入れる辛辣さを持ち得た。

全般的に見ると、飯沢の作品は書かれた時代の空気や風潮を風刺する事が多く、日本演劇史の中でも、同時代性を貫き続けたという点で抜きんでている。劇外の声を活用する叙事的手法などを取り入れつつも、時代の社会問題を如実に反映したリアリズム基調の風刺喜劇を完成させていく点で、日本演劇の中では他に類を見ない劇作

家となっている。

【論文審査の結果の要旨】

従来演劇研究では、悲劇や詩劇、古典劇や前衛劇などを主に研究対象として来た。そこでは娯楽的な喜劇や風俗劇は、価値が低いと見なす訳ではないにしろ、研究対象としては周辺に位置していた。「生真面目」な新劇が中心を占めてきた近代日本演劇史において、飯沢匡は近代劇の範疇で一貫して喜劇を書き続けた点において他に類を見ないが、今まで生涯を見通すような本格的な研究はほとんどなされて来なかった。本論文はそのような飯沢匡のほぼ全作品を概観した上で、劇作家としてのあり方を演劇史に位置づけた点で貴重な研究である。ここでは主としてドラマツルギーを研究して、戦時下での作風と戦後期の作風との明解な区別をなしえた点、また戦後 70 年代以降の日本の政治風土の保守性に対して、飯沢が取った批評の形式がリアリズムを基調にした独特の風刺喜劇であったことを明らかにした点もまた評価される。戦時下でのドラマツルギーでは、寓意を使う形式の中で、表面的な滑稽さを生み出しながらも、その表面下で時代の風潮に対する批判性を忍ばせる卓越した手法を生み出した点を明らかにしたことも興味深い。ブレヒトの異化効果を独自のものに吸収し、日本のブレヒト主義を信奉する同時代の新劇人からは冷ややかに見られたが、本国ドイツにおいてはブレヒトの手法の日本化の優れた例として高い評価を受けた点も明らかにした。問題点も散見された。先行研究の渉猟が今ひとつ不十分である点、戦時下で飯澤が取った手法を分析しているが、その分析結果と先行研究との違いが明確でない点、論文を通して上演分析への配慮があまりない点、飯沢の作品についての劇評が少ないことは理解できるが、他に各劇団の台本、舞台装置図、演出手記などさらに広く渉猟するべきだった点などがあげられる。戦時下、戦後、70 年代以後と戦後日本の演劇史を３時代に区分することで時代背景との関わりをもう少し論究できたのではないか、あるいは作品全体をその傾向によってこの３時代ではなく、もっと別様に分類することも有効ではなかったかなどの指摘もあった。しかしこれらの諸点の課題は残すものの、本論文は飯沢匡のドラマツルギーについてのまとまった研究としては貴重なものであり、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。